

二級河川伊佐津川水系河川整備基本方針

平成24年8月

京 都 府

二級河川 伊佐津川水系河川整備基本方針(案)

目 次

1. 伊佐津川水系の総合的な保全と利用に関する基本方針 -----	1
(1) 流域及び河川の概要 -----	1
(2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針 -----	3
2. 河川整備の基本となるべき事項 -----	4
(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項 -----	4
(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項 -----	4
(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項 -----	5
(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するために必要な流量に関する事項---	5
(参考図) -----	6

1. 伊佐津川水系の総合的な保全と利用に関する基本方針

(1) 流域及び河川の概要

伊佐津川は、その源を綾部市於与岐町の丹波富士とも呼ばれる標高 664m の修験の靈峰弥仙山に発し、綾部市域を西へ流れた後、北に流れを変え舞鶴市の西地区市街地を池内川、天清川、米田川を併せながら流下し舞鶴湾に注ぐ、流域面積約 75km²、流路延長約 17km の二級河川である。

若狭湾の西部に位置する舞鶴湾は、狭い湾口から湾奥は東西に分かれて湾入する静穏な海域であり、伊佐津川はその西湾に流入する。



流域の地勢は、綾部市域を流下する上流部及び舞鶴市域のうち、池内川合流地点の上流、国道交差付近から市境までの中流部は、山地が大部分を占める。

下流部は「谷底平野・氾濫平野」となり、舞鶴市の西地区市街地および主要交通網が広がっている。

流域の地質は、概ね泥質岩が占めるが、上流域には梅迫層と呼ばれる主に礫・砂・泥の層が、中流域には礫質堆積物が、下流域には砂質堆積物が、伊佐津川本川に沿って広がっている。特に池内川の合流点付近には、「自然堤防沿いの微高地」が見られ、洪水時に土砂の堆積が生じやすい。

伊佐津川の河床勾配は、上流部は約 1/50、中流部は約 1/100、下流部では約 1/500 と緩くなり、河口から約 1.6km の天清川合流点付近までが、潮汐の影響を受ける感潮区間となっている。

伊佐津川の河道形状は、上流部及び中流部が掘込であり、下流部が河口部のパラペット区間を除き築堤となる。特に下流部左岸の築堤区間においては、平均的な川底と堤内側の地盤高に高低差がほとんど無く、天井川に近い形態をなす。

流域の既往水害は、明治 29 年 8 月の豪雨による伊佐津川堤防の決壊により、市街地で床上五尺の浸水記録等が残されている他、昭和 28 年 9 月の台風 13 号（既往最大規模：概ね 1/50）により高砂橋が流失し、堤防決壊の危機が生じた。また、市内において床上床下浸水が 2,600 戸、流失家屋 850 棟、田畑の冠水・流出 1,000ha の甚大な被害が発生している。近年においても、平成 2 年 9 月の台風 19 号で床下 37 戸・床上 3 戸、平成 10 年 9 月の台風 7 号、平成 16 年の台風 23 号でも床下浸水、橋梁・護岸損壊等の被害が発生している。また、河口部では、高潮による家屋浸水被害が発生している。

伊佐津川は古くは真倉川^{まぐら}と称し、現在の位置より西を流れる現在の高野川へ注いでいた。

改修の歴史は古く、江戸時代初期に田辺城（現在の舞鶴城）の城下町整備とともに流路の瀬替が行われ、池内川と併せて現在の舞鶴市西地区市街地の東部の山裾を流れるようになった。また、昭和 28 年の大出水を契機として、昭和 33 年から中小河川改修事業として実施し、高砂橋から池内川合流点の堤防補強ならびに老朽護岸の改良を実施した。その後、昭和 62 年から平成 15 年の間、小規模河川改修事業として高砂橋の架替や護岸整備を実施し、併せて、支川の改修事業についても着手し、天清川については平成 15 年度に一定改修を終えている。平成 20 年からは、天井川に近い形状である左岸築堤部の堤防補強等を実施している。

流域の気候については、冬期に降水量が多い日本海型気候区に属し、年間降水量は約 1,830mm と、全国の年平均降水量約 1,720mm と比較して若干多い。

年平均気温は約 14.5℃であり、夏期平均気温は 25℃程度、冬期平均気温は 5℃程度であり、舞鶴湾沿岸域での冬の気温は比較的高いため、府内の日本海側地域に比べ積雪量は少ないが、山地部においては気温が低く積雪も多くなる。

流域の動植物等については、流域の広い範囲でコナラ群落やアカマツ群落が分布している他、上流部には竹林が、下流部にはスギ・ヒノキ植林などが見られ、伊佐津川本川でスナヤツメやアカザ（絶滅危惧Ⅱ類（「環境省レッドデータブック」以下同じ））やシロウオ（準絶滅危惧）などの希少種をはじめ、多種の魚類が確認されているとともに、支川の池内川では、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオ（絶滅危惧Ⅱ類）の他、カジカガエル、モリアオガエル等の両生類が確認されている。また、昆虫類ではギフチョウ（絶滅危惧Ⅱ類）やオオムラサキ（準絶滅危惧）が確認されている。流域の山地部では、カモシカやツキノワグマ等のほ乳類が確認されている他、弥仙山周辺では、クマタカ（絶滅危惧ⅠB類）やオオタカ（準絶滅危惧）等の希少な鳥類や河口周辺部では、ミサゴ（準絶滅危惧）、オシドリなどが確認されている。

水質は、伊佐津川全域が環境基準の A 類型に指定されており、基準点の相生橋では、BOD が 0.8～1.8mg/l^{リットル}程度であり、概ね清澄な流れを示している。

河川水の利用は、農業用水としてかんがい^{かんがい}に利用されているほか、工業用水や融雪用水としても利用されている。

流域の文化は、河口に近い大和橋^{やまと}付近では、川の中で巨大な灯籠を回す勇壮な火祭り吉原^{よしわら}の万灯籠^{まんどろ}が行われ、夏の風物詩となっている他、中流部の黒谷では、良質^{こうぞ}の楮と伊佐津川支川の普通河川である黒谷川^{くろたに}の清流を活かした黒谷和紙の産地として知られ、今もなお伝統的な手漉^{てす}きの技法による製紙が行われている。

(2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

伊佐津川水系における河川の総合的な保全と利用に関する基本方針は、河川整備の現状、水害の発生状況、河川利活用の現状、流域の文化、河川環境の保全等を考慮し、また、関連地域の社会経済情勢の発展に即応するよう、京都府政運営の指針や関連市の総合計画等を考慮し、計画的なまちづくりとの連携や土地利用に関する調整を図るとともに、水源から河口まで一貫した計画のもとに河川の総合的な保全と利用を図る。

災害の発生の防止又は軽減に関しては、沿川地域を洪水から防御するため、河川改修を行う。改修規模としては、既往最大の洪水である昭和 28 年 9 月台風 13 号出水に対処でき、地域特性や京都府域の河川整備の均衡を考慮し、概ね 50 年に 1 回程度の降雨により予想される洪水を安全に流下させる能力の確保を図る。併せて、河口部の感潮区間においては、高潮による被害の発生防止に努める。

さらに、河川が氾濫した場合においても被害を最小限にとどめるために、各種防災情報の提供などソフト対策の充実を図り、地域防災活動の一層の支援を行う。

河川水の利用に関しては、現在も良好な河川環境のもとに水利用がなされていることから、今後とも適正な水利用が図られるように努める。

流水の正常な機能の維持に関しては、良好な水質、多様な生物の生息・生育環境、景観等が維持されるように努める。

河川環境の整備と保全に関しては、中上流部では、豊かな自然環境に配慮し、多様な生物が生息できる水辺空間の創出・保全を図り、市街地が広がる下流部では、風土、歴史、文化を踏まえ、人々にうるおいと安らぎを与える水辺空間の創出を図る。

河川の維持管理に関しては、災害発生の防止、河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持及び河川環境の整備と保全の観点から、関係管理者と連携し、適切に行うものとする。

2. 河川の整備の基本となるべき事項

(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項

概ね50年に1回程度の降雨により予想される洪水を河口から1.9kmの二ツ橋^{ふたつばし}地点において750m³/sとし、この全量を河道により流下させる。

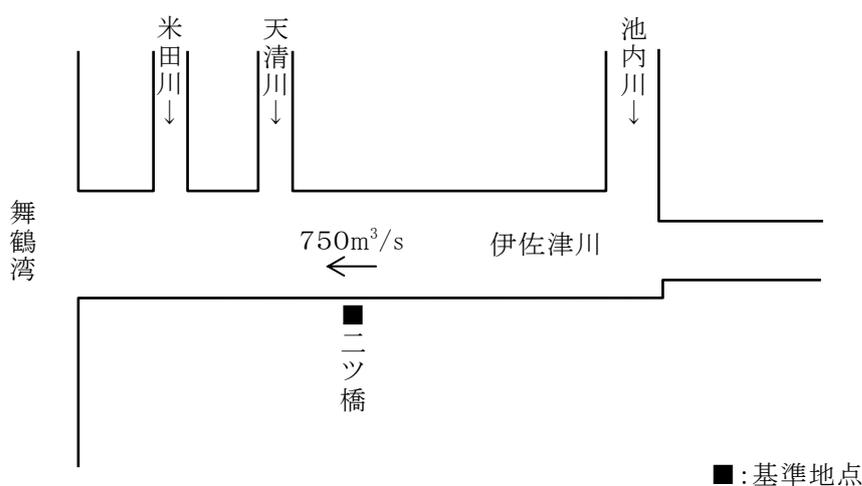
基本高水のピーク流量等一覧表

(単位:m³/s)

河川名	基準地点	基本高水のピーク流量	洪水調節施設による調節流量	河道への配分流量
伊佐津川	二ツ橋 (河口から1.9km)	750	—	750

(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項

伊佐津川における計画高水流量は、二ツ橋地点において750m³/sとする。



(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項

伊佐津川の主要な地点における計画高水位及び計画横断に係る概ねの川幅は、次のとおりとする。

河川名	地点名	河口からの距離	計画高水位	川幅
伊佐津川	二ツ橋	1.9km	T.P.+5.38m	68m

注) T.P. 東京湾中等潮位

(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため 必要な流量に関する事項

伊佐津川水系における既得許可水利権は、工業用水 0.066m³/s、農業用水 0.560m³/s、融雪用水 0.014m³/s であり、その他にも農業用水の慣行水利権がある。

流水の正常な機能を維持するための必要な流量は、流況、河川環境保全等の関連事項について引き続きデータの蓄積に努め、今後さらに検討を行う。

伊佐津川流域図（参考図）

